



とりかい しんいちろう

## 鳥飼 慎一郎

立教大学 異文化コミュニケーション学部



たまるや まさゆき

## 溜箭 将之

立教大学 法学部国際ビジネス法学科

### ■主な研究テーマ

コーパス言語学に基づく司法英語の数量的質的分析、日本人学習者用活用発信型の司法英語辞書の開発

### ■関連キーワード

司法英語、活用発信型の英語辞書、イギリス最高裁の判例、イギリスのロージャーナル、アメリカ最高裁判例、アメリカのロージャーナル、英語の契約書、コーパス言語学、使用頻度、コロケーション

### ■主な採択課題

基盤研究(B)2011年度～2015年度(配分総額: 13,910千円)  
課題名:「コーパス言語学に基づく司法英語の活用発信型辞書の開発」

## ① 科研費による研究成果

### ■これまでの研究成果で明らかにしたこと

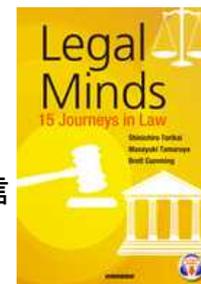
- ① 司法英語では一般的な語が一般語義と司法語義とで使い分けられており、それが日本人学習者を混乱させている。  
例: act 法律, action 訴訟, case 事件, party 当事者, title 権原
- ② 司法英語では初心者にとって区別することが難しい類義語が数多く存在している。  
例: 弁護士; lawyer, solicitor, barrister, counselor, attorney
- ③ 専門的な法律の概念の違いを複数の法律用語を使って書き分けるだけでなく、それらの用語を導入するための文法文型が複雑である。  
例: 責任 responsible/responsibility, liable/liability
- ④ 司法英語の専門業語と基本的な動詞との間でネットワークを構築し、互いを組み替えることで、微妙なニュアンスの違いを表現している。  
例: bring, file, enter, make, hold ⇔ proceedings, suit, plea

### ■学術的な重要性

- ① 上記の4点について、その違いを地域別(イギリスとアメリカ)、ジャンル別(判例とロージャーナル)ごとに数量的に明らかにした。
- ② 教員の経験と勘に頼ってきた司法英語教育の分野に、コーパス言語学に基づく数量的で客観性の高い言語情報を導入した。
- ③ 辞書という形で司法英語の専門知識を世代を超えて蓄積し、時空間を超えて日本人司法英語学習者が共有できるようにした。

## ② 当初予想していなかった意外な展開

- ① 本研究は、2015年5月12日の毎日新聞に掲載された。方法論を確立できれば、法学以外にも応用可能だ。「次は物理学に挑戦したい。英語のハードルが低くなると、日本の研究者はもっと世界で活躍できるはずです」
- ② 本研究の成果を基に、2014年に金星堂から『Legal Minds: 15 Journeys in Law』を出版、法学部の法律英語の授業では、2014年度に209人、2015年度に339人が履修登録する大人気の授業となっている。
- ③ 三省堂から既に本研究成果を基にした司法英語の活用発信型英語辞書の出版の申し出を受けており、2020年を目途に出版することで話を進めている。



## ③ 今後期待される波及効果、社会への還元など

本研究の方法論を用いれば、専門分野の英語力を獲得するためにこれまで日本人が費やしてきた時間、労力、予算を大幅に減らすことができ、国際的に活躍する基盤となる専門性の高い英語の発信力を短期間に効率よく習得することが可能となる。本研究は、その方法論を司法英語分野でまず確立し、他の専門分野に応用するための研究である。